

[淀川下流域の河川環境上望ましい流量に関する検討会]

～ 第1回検討会（平成17年8月4日開催）意見概要 ～

(1) 生物について

- ・ 淀川の河口域は汽水性であり、2月頃にスズキの稚魚が十三大橋から新御堂の上淀鉄橋にかけての地域で孵化をする。親魚が12月中旬ぐらいに泉南の岬町の沖合で産卵し、その卵が季節風や海流に乗って淀川に入るといわれている。
- ・ 淀川の河口域はヨシエビの繁殖地ともなっており、一昨年（15年）から国土交通省による干潟造成の実験が行われている。
- ・ 微生物（EM）が含まれただんごや液の注入により、淀川河口域の改善を試みており、生物のいなかったところに100日後シジミが繁殖した。現在では、これらの大量投入を開始しており、シジミも4倍程度に増加しており、年間20トン程度であった漁獲量が、今年100トン程度にまで増加すると予想されている。
- ・ 現状の魚類のデータを提示してもらい、問題認識の共有を図る必要がある。その上で「代表魚種の選定」「評価基準の設定」を慎重に検討していく必要があると考える。
- ・ 動植物については、他の項目との関係が深いいため、これらの評価基準についても十分に議論し検討していく必要がある。
- ・ フラッシュ操作は、生物の産卵のみではなく、生息にとっても非常に惑わされる操作であると考えため、このフラッシュ操作による大川の環境改善効果を把握する必要がある。今後このような「試行の実施」は重要となると考える。
- ・ フラッシュ操作は、自然とは異なり潮の干満による塩分濃度差をさらに大きくするため、生物に対して非常に問題であると考え。

(2) 水質について

- ・ 道頓堀川においても、微生物（EM）を含むだんご及び液の注入を実施している。これにより道頓堀川の異臭（臭いドブのにおい）が2ヵ月で減少し、底質の改善が図られた。
- ・ 近年、尻無川や神崎川でも微生物（EM）を含んだ液体を投入し、改善作業を推進した。
- ・ 「流水の清潔の保持」とは非常にわかりにくい言葉であり、水質の問題、場合によっては底質の問題が関係してくると考える。「流水の清潔の保持」は、「漁業」、「観光」、「塩害」、「景観」、「動植物」、「人とのかみあひ」といった全ての検討項目と関係があり、その目標としていく指標選定は慎重に考える必要がある。
- ・ BOD、CODの議論では、堰、汽水域の滞留時間の問題等があるため、栄養塩のレベルについても検討していく必要があると考える。
- ・ 「人とのかみあひ」としては、大腸菌を考慮する必要がある。これらは、晴天時だけではなく雨天時の合流式下水道の問題も関係してくる可能性があるため、流入地点位置等の把握も必要であると考え。
- ・ 水質では状況調査だけではなく、水質予測シミュレーション計算も有効な手法である。

そのため、流域からの流入負荷を可能な限り正確におさえる必要があり、現状でのレベルと同時に「20～30年後にこんな状況になっているのではないか」という状況を予測しておく必要がある。

- ・ 水質の検討では、将来の流入負荷量の増減、浄化手法等、流量以外の様々な要素が関係していると考ええる。
- ・ 5年、10年後の分流式下水道の改善状況や水質の状況等、各担当部局の予想が知りたい。

(3) 景観について

- ・ 寝屋川駅前の事例で、「水量が多すぎる」と感じるの水量は避けるべきだと考える。そのため、アンケートでは、「水量が少なすぎる」「多すぎる」「適当である」という表現で意見を聞くほうがよいと考える。

(4) 地下水位について

- ・ 地下水位に関しては、現在では水位が上昇してきており、今回検討する範囲で流量を増減させても、地下水位の変動にはほとんど関与しないと考える。
- ・ 低水、渇水期であれば、地下水と流量との関連が見出せるかもしれないため、地下水の検討を省くのではなく、当面大きな問題提起はしないことにすればよいと考える。

(5) 塩害について

- ・ 地下水や下流域の表流水を利用して塩害が生じている場合、例えば、工業用水であれば水道を引く等の流量を確保する以外の方法があるため、このような項目の検討は省いて、検討する項目を減らしたほうがよいと考える。

(6) 検討方針について

- ・ 「検討必要項目」では、「動植物の生育・生息地の状況」の改善が重要であり、これが達成されれば、漁業の問題、観光の問題、景観の問題等に効果が波及していくと考える。
- ・ 検討の初期において「検討必要項目」を限定する必要はないと考える。今後の議論で絞り込む方向性が出れば、そのように進めていけばよいと考える。
- ・ 現状と過去に加えて、将来の20年後から30年後の姿、例えば大阪周辺の町、人口、水利用の将来的な見通し等を議論していく必要が出てくると考える
- ・ 維持流量は平常時の流量の話であるが、出水時において河川環境が大きく攪乱されるため、これらのことも念頭において検討していくことが必要であると考ええる。
- ・ 社会経済的な背景を含めた20年、30年先の基本的使用量の予想があり、その量に対して必要な流量を考えていくことが必要される。

(7) 必要流量及び運用方法について

- ・ 維持流量の期間区分は一日の時間単位で細かく設定する必要がある。特に、「人と河川との豊かなふれあいの確保」では安全の確保が重要であり、設定した維持流量を最低流量として積み上げていくだけではなく、時間ごとに様々な配分を設定していくほうが有効であると考ええる。

- 寝屋川市内あるいは北部の寝屋川流域では農業用水による取水が重要な役割を果たしている。将来、農地の減少により農業用水が不要になる可能性があり、寝屋川流域の環境改善を目指して、その水を転用してそのまま農業用水に流していくことも有効ではないかと考える。
- 20年先、30年先の構想であるため、維持用水に関係してくるような用水源は、議論の中に加えて行く必要があると考える。
- 「望ましい流量」としての流量の問題とフラッシュ操作等の運用の問題は、ある程度整理して協議していく必要がある。